

読解力を高める国語科学習指導の在り方

鳥栖市立鳥栖北小学校 教諭 長尾 真司 嬉野市立久間小学校 教諭 渡邊 陽子
佐賀市立昭栄中学校 教諭 原口 真

1 研究の趣旨

平成17年度佐賀県小・中学校学習状況調査から、他の領域に比べ「読むこと」の領域の通過率が全国より下回っているという結果が出た。また、OECDのPISA調査の結果からも読解力の低下が指摘され読解力の向上は全国的な課題となっている。

読解力のとらえ方については様々な見解が出されているが、本研究では、学習指導要領に示された「読むこと」の領域における指導事項ととらえることとする。

学習指導要領では、国語を「正確に理解する能力」⁽¹⁾⁽²⁾の育成が国語科の目標とされている。また、「指導内容と言語活動との密接な関連を図り、児童の主体的な学習活動を促しながら学習の効果を上げるため」⁽¹⁾（中学校も同様）に言語活動例が示されている。「読むこと」の領域では、読み聞かせ、読書発表会、音読や朗読、読み比べ、情報の読み取りなどの言語活動例が挙げられている。

しかし、近年「話すこと・聞くこと」の研究に偏るという傾向や、「読むこと」の単元において、言語活動が行われても、「読むこと」の力を高めることにつながらないという状況などが見られる。また、依然として単調な一問一答の授業から抜け出せず、学習者自身の読みを作り出していない現状もある。

このような状況から、本グループでは、「表現を取り入れた」言語活動を行うことで、学習者が主体的に読み、「読むこと」の力を高めることができるような指導方法の研究を行った。

2 研究教科・領域等

小学校国語科，中学校国語科において，研究課題の解決に向けて研究を行った。

3 研究の成果

本グループでは、「表現を取り入れた」言語活動を行って「読むこと」の力が高まる指導方法の工夫について研究を進めた。「表現を取り入れた」言語活動とは、読みを表現に置き換えていく中で「読むこと」の力を付ける活動とした。

「表現を取り入れた」言語活動は、身に付けさせたい力、教材の特性、学習者の実態の3つの視点を踏まえて決定した。（次頁図1参照）

学習指導要領には、「読むこと」の学習において身に付けさせたい力として、「叙述内容に即した読み」、「想像的な読み」などが指導事項として示されている。これらを確実に定着させるために、指導事項に示された言語能力を単元目標や各単位時間の指導目標レベルに具体化した。

教材の特性として着目したのは、内容と形式である。内容としては、科学的、論理的な見方や考え方を育てる、他人を思いやる心を育てる等、学習者にとってどんな学ぶべき内容的な価値があるかに配慮した。形式としては、文種や構成、語彙等に着目した。特に言葉レベルでの教材分析をし、その言葉の意味や役割を学ばせるのに適した「表現を取り入れた」言語活動を考えた。

学習者の実態では、手段として用いる「表現を取り入れた」言語活動を行う能力が備わっているか、内容に関する生活経験や興味・関心がどの程度あるかなどを把握した。

これらの3つの視点を詳しく分析し、それぞれのかかわりを考えながら、音読劇、図鑑作り、本の帯作り等の「表現を取り入れた」言語活動を設定した。このように、学習者に明確で魅力的な活動目標をもたせたことで、表現するために繰り返し文章の記述に戻って考えさせることができた。

「表現を取り入れた」言語活動は、読み取りの過程に行い、学習者に自分の読みをもたせ、自覚させるために読み取ったことを表現させた。これにより教師が、学習者の読みの状況を把握しやすくなり、読み取りが不十分な学習者に対して、適宜指導を行うことができ、どの学習者にも自分の読みをしっかりとめさせることができた。加えて、読みを表現に置き換えさせたことで互いの読みが比べやすくなった。

また、読みを深めるために考えを交流させる場を設けた。これにより、グループや全体での交流の場で学習者に考えを活発に発言させることができ、より確かな読みや新しい読みを生み出させることができた。加えて、文中の叙述に着目させ、読み流しただけでは分からない言葉の意味や役割にも気付かせることができた。

毎時間の終末では、目標に対しどのように学習を進め、何ができたのかを自覚させるため、どの言葉に着目して、どんな「表現を取り入れた」言語活動を行ったのかを振り返らせた。その際、発達段階に応じて教師が言葉を補いながら活動を振り返らせたり、ワークシートに自己評価をさせたりした。初めは、活動や文章の内容に関する感想が多かったが、学習を進める中で学習の内容と方法にかかわる自己評価をさせることができた。このことで、文章の読み方を自覚化させることができたと考えられる。

以上のように、身に付けさせたい力、教材の特性、学習者の実態を詳しく分析し、それぞれのかかわりを考え、「表現を取り入れた」言語活動を設定することで、学習者に読むことへの必然性をもたせ、主体的に読ませることができた。また、読みを表現に置き換えさせることで、確かな読みや豊かな読みをもたせることができた。これらのことから、「活動あって学び無し」の授業にならず、「読むこと」の力を高めることができたと考えられる。

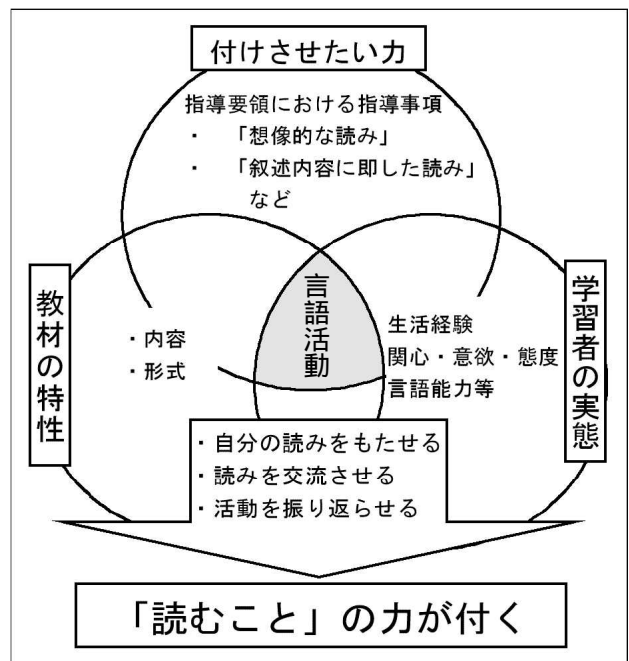


図1 「表現を取り入れた」言語活動のとらえ方

4 今後の課題

- (1) 「表現を取り入れた」言語活動の有効性について、音読劇、図鑑作り、本の帯作り等の活動については効果を検証することができたが、他の表現方法についても今後探っていく必要がある。
- (2) 「表現を取り入れた」言語活動の中での交流のさせ方については、更に研究していく必要がある。

《引用文献》

- (1) 文部省 『小学校学習指導要領解説』 1999年 東洋館出版社 p.5, p.7
- (2) 文部省 『中学校学習指導要領解説』 1999年 東京書籍 p.9

《参考文献》

- ・ 倉澤 栄吉・野地 潤家監修
『朝倉国語教育講座 1 国語教育入門』 2005年 朝倉書店